論文の和文要旨

論文題目	競合する語り：香港で働くインドネシア人家事労働者によるイスラーム文学創作グループ「ペン・サークル・フォーラム香港」
氏名	澤井　志保

本稿は、海外で働くインドネシア人女性家事労働者（IDW）が休日を利用して携わる宗教文学創作運動を取り上げて、国際移住家事労働する女性が、どのような問題に対峙しながら望ましい自己像を実現するかについて詳しく考察するものである。具体的には、IDW によって結成されたイスラーム文学創作運動グループ、ペン・サークル・フォーラム香港（Forum Lingkar Pena Hong Kong,以下 FLP 香港）が創立される経緯を検証しつつ、グループ活動において見られたメンバーの語りと創作作品における言説を分析し、この社会運動の意義について詳しい検討を試みる。

本稿は、(1)2008 年 10 月から 2009 年 3 月までの 6 か月間の香港での現地調査、(2)2010 年 3 月－4 月にインドネシアにて行った追加現地調査　のほかに、補足資料として、(3)2006 年 9 月から 2008 年 8 月まで留学していたインドネシア、中部ジャワでの文学出版と文学愛好者についての調査において収集した情報をもとに議論を行う。

香港は、インドネシア人移住家事労働者の受け入れにおいては世界第 6 位であり、主要受入国のひとつである。しかし、これら 1 位から 5 位までの国ではなく、香港にてこのような社会運動が生まれた背景には、香港だけではなく、インドネシアと香港両方の社会状況が関わっていたと考えられる。これを踏まえて本稿は、FLP 香港が成立する経緯も問題の射程内にとらえ、詳しい検討を試みる。

FLP 香港の設立は、2004 年にさかのぼる。この日以来、FLP 香港は「ペンによる＜ダアワ＞(ムスリムによる、人々をアラーの説く道に招き入れようとする一連の啓蒙、啓発活動。他者に対してであるとともに、自分に対する働きかけにもなりうる。また、非ムスリムの改宗運動も含まれる)」というスローガンのもと、イスラームの価値に沿った文学創作、出版活動のほかに、宗教指導者による宗教的講話や、映画上映会などのイベントなど、イスラームと文学創作にゆるやかに関連する活動を行っている。

このような、イスラームを標榜した啓蒙活動を行う IDW のグループは、2010 年時点では、全香港で 100 グループ以上に達したことを考えると、FLP 香港の出現は、2000 年代後半における IDW によるイスラーム系社会運動の拡大の経緯を暗示していたともいえる。

インドネシアでは、1998 年までの 30 年間、権威主義的政権が実権を掌握していたことから、政治にかかわる社会活動の自由が著しく制限されてきた。このような自由の制限は、権威主義政権が終焉して 10 年以上たつ現在においても、いまだ、現地の社会的価値観として存在している。加えて、主に都市部知識層によって牽引されてきたインドネシアの社会運動の歴史を考えると、非都市部出身の高等教育を受けない階層に属する女性移住家事労働者が海外で社会運動に参加するという事実自体が、深い考察に値すると考えられる。さらに、女性移住家事労働者が文学創作・出版活動を行っているという事実は、2000 年代半ばのインドネシアにおいては斬新な現象であった。なぜなら、インドネシアでは、女性家事労働者は「バブ」（元来は「家事労働者」を指すジャワ語語彙で、ジェンダーと階級の面から差別的な意味をもつ）と呼ばれ、非都市部の教育水準の低い女性に特有の職業とみなされ、封建的な主従制度の中の搾取の対象、ないしは、男性を誘惑する性的放埒の象徴として、文学的記述の対象とはなっても、文学の著作を行う主体としては見なされてこなかったからである。インドネシア国内のメディア言説も、国際移住家事労働者女性を、国境を越える「バブ」とする言いまわしを頻繁に使用していたことも、そのような事実を物語っている。

そもそも、非都市部出身で高学歴ではないインドネシア人女性が海外にて家事労働者として働くことが一般化する背景には、親密性労働のグローバル化がある。親密性労働とは、人間の生命活動のすべてを円滑に運営するために，ある個人の性的欲求の充足，良好な身体と精神状態の維持，他人を愛し，他人との情緒的関係性の構築と維持するなどの「親密的要求」を満たすべく世話をする労働である。家事労働は、親密性労働のひとつであり、「家事は女の仕事」というステレオタイプにも見られるように、ジェンダー化された労働である。元来は、国境の内部でシステム化され、女性の無賃・低賃金労働として引き受けられてきた家事労働が、現在においては市場化され、国際的に外注されることで、女性移住家事労働者の大規模送り出しと受け入れという現象を生み出したとすれば、女性家事労働者の国際移動は、家事労働にまつわる既存のジェンダー間のステレオタイプ（「家事＝女の仕事」）を、国籍・エスニシティ・階級・宗教に分岐（「家事＝外国人女性の仕事」）させる事態を引き起こした。

このようにして生まれた女性国際移住家事労働者は、親密性労働のグローバル化という構造的変化に応答し、日常生活レベルの実践に変換する媒介者ーエージェントとして機能している。だからこそ、個々の女性の経験を、女性たちの紡ぎ出す「語り」によって明らかにしようというのが、本稿の目的である。

実際のところ、FLP 香港における文学創作の出現は、ジェンダー化された職業としての女性移住家事労働者による社会運動であるというだけではなく、女性家事労働者が、海外にて自分の関わるジェンダー関係をイスラームというレンズでとらえ

ながら語りを行うという意味で、インドネシア人としての宗教実践とインドネシア語文学のあり方の再形成プロセスとも不可分である。つまり、FLP 香港の活動形態の背景には、香港とインドネシアそれぞれのローカリティとともに、二国をまたぐトランスナショナリティがみてとれる。このような状況下で、FLP 香港が、イスラームと文学による啓蒙を第一義として掲げ、「ペンによるダアワ」を行っているという事実は、このグループが、家事労働のグローバル化に応答しつつ、文学創作活動とムスリムとしての望ましい価値観の実現を統合させようとしていることを示している。

上記の現地調査をとおして著者は、この一見明白な宗教文学運動は、実は宗教的、文学的達成感のためのみならず、メンバーたちが、家事労働者として国際移住するプロセスの中で生み出されてきた、広義の理想の女性像を効果的に体現するために存在すると考えるようになった。換言すれば、FLP 香港の活動は、メンバーたちが、国際移住家事労働者女性として抱える多面的な主体性を、宗教と文学というラベルでもって（再）文節化し、表現しなおす行為と不可分なのである。

この点を踏まえて本稿では、FLP 香港のメンバーたちが、こうした自己の再分節化に積極的に参加することで、親密性労働のグローバル化を自分なりに認識し、解釈し、実践していく状況を考察する。

このために本稿は、次のような問いについて考察する。

（１）なぜ香港にて、このような宗教文学運動が出現したのか？

（２）FLP 香港のメンバーがおこなう主体性の表現の目的は何か？

（２）については、(a)社会的マイノリティとしての宗教実践　とともに、(b)IDW として、できる限り望ましい自己像を実現することが目的であるという主張のもとに議論を展開する。とくに(b)においては、(i)　移住家事労働の意味　(ii)　望ましい女性像　(iii)移住家事労働をめぐる関係　というテーマが、メンバーの語りとテクストの両方で中心的な位置をしめていた。したがって本稿は、これらがメンバーたちの置かれた国際移住家事労働をめぐる社会関係において異なる価値観を対立させたり、交渉して妥協点を見出したりすることで、自己の主体的位置を吟味しながら、可能な限り調整するための手段となっている様子を検証する。

議論の流れとしては、第 1 章の先行研究の検討、第 2 章の研究の方法論のあと、第 3 章にて、FLP 香港設立の経緯を追う。具体的には、インドネシアの中小規模出版業の拡大とイスラーム文学のという出版カテゴリーの出現、コムニタスの成長、そして香港での IDW についての規制と交通、通信インフラが後押しするかたちで IDW による社会活動グループが増加したことにより、10 名あまりの文学愛好者の IDW 有志によって、FLP 香港がイスラームを核として結成されていくプロセスが検討される。これにより、上記（１）の問いが検討される。続いて上記（２）の問いに答えるために、第 4 章から第 6 章で、FLP 香港の定例活動にてメンバーたちの発言と創作されたテク

スト両方にみられる「語り」を取り上げて検討する。第4章では、FLP香港の活動形態について整理しつつ、上記(i)～(iii)に関わる語りのポイントを整理する。第5章では、FLP香港が発行する月刊ブレティンの言説、第6章ではFLP香港が出版した2冊の短編小説集にみられる記述を取り上げて、上記(i)～(iii)の概念がどのように描かれるかについて考察を行う。第6章では短編小説テクストを精文分析し、テクスト中に描かれたIDWの主人公に関わるメトニミー（換喩）の対立性を詳細に分析し、意味の転覆や再文脈化が行われるプロセスを＜語りの競合＞として精査する。これにより本稿は、語りによる「望ましい自己像」が、FLP香港のもつイスラームという枠には収まりきらないことを指摘する。つまり、IDWメンバーたちが海外での家事労働にて直面する問題は宗教という枠には収まりきらないものの、イスラームという大義が、イスラーム以外の倫理道徳や価値観をも包括する力をもっているからこそ、語り手たちに支持されるのである。つまり、語りにみられる「イスラーム」という理想は、ときに家事労働者への差別に抗議し、結婚できずに「行き遅れ」たりせず、しかし一方で間違った恋愛関係にも陥らないよう自戒するためにも使われるような、ときに曖昧さと矛盾をはらむ概念であった。しかしながら、このような多様な文脈をある程度首尾一貫したものとして包括的にまとめあげ、広義の理想の女性像として成立させられるのが「イスラーム」だからこそ、FLP香港のメンバーは、多忙な日常生活の合間を縫って、このグループにて活動を行っているといえる。つまり、FLP香港のメンバーは、イスラームがもちうるこのような機能を最大限に利用して、より望ましい自分像を多様な社会関係の中で立ち上げながら、親密性労働のグローバル化に応答しているということである。